国際研究論叢　37（3）：115 ～ 135，2024

研究報告

フレネ教育から学ぶ音楽教育の新たな展開：ピアノ実技指導における主体的・対話的で深い学びの探求

別　所　ユウキ*

New Developments in Music Education Learning from Freinet Pedagogy: Exploring Proactive, Interactive and Authentic Learning in Piano Performance Instruction

Yuki Bessho*

Abstract

This research explores new approaches in music education within the framework of 21st-century education, applying the principles of Freinet pedagogy. The objective is to overcome the limitations of traditional Japanese music education by centering on learners' curiosity, thus fostering an environment that nurtures autonomy and creativity. Utilizing Freinet's principles and techniques, I developed and validated a new method focusing on the importance of interaction with others and the skill of verbalization. The results demonstrate that practices based on these focal points significantly enhance learners' autonomy and facilitate dialogue with others. Building upon these findings, this study seeks methods to encourage proactive and interactive learning in piano performance instruction.

キーワード

フレネ教育、主体的な学び、芸術的表現、音楽教育、ピアノ実技指導

Keywords

freinet pedagogy, music education, artistic expression, active learning, piano performance instruction

＊　べっしょ　ゆうき：大阪国際大学短期大学部非常勤講師／神戸女学院大学音楽学部非常勤講師〈2023. 12. 1受理〉

Ⅰ　序論

1．社会的背景と研究の着想

現代社会は、AIをはじめとしたテクノロジーの進展を筆頭に、従来の生活様式や価値観の変容を余儀なくされるほどの急激な変遷を遂げている。さらに、新型コロナウィルスのパンデミックや国際情勢の不安定さをはじめ、我々の生活は持続的な不確実性に晒されている。このようなVUCA[1] の時代を健やかに生き抜くため、学習者を主体とした「21世紀型スキル」を育成する教育が、教育先進国を中心に形成されている。従来の知識詰め込み型教育に代わり、主体的な学習によって協同性、創造性、批判的思考力、コミュニケーション力、探究心、情動を制御する力をはじめとした非認知能力を育むものである。

日本においても、文部科学省が「主体的・対話的で深い学びの実現」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「STEAM教育[2] 等の教科等横断的な学習の推進」など、21世紀型教育のグローバルスタンダードに沿った教育指針を提示している。実際、教育の現場では「総合的な学習の時間」の導入を始点として「アクティブ・ラーニング」や「哲学対話」のような、子どもの主体性を重視した課題解決型学習が推進されてきた。しかし、教師の専門性や資質の不足、子どもたちのコミュニケーション能力の不足といった課題が顕在化し、これらの教育方法の全面的な浸透にはまだ至っていないという現状が指摘されている。

2．日本におけるピアノ実技指導の現状と課題

「STEAM[2]」の一端を担う音楽の領域においても、主体的な学びへの転換はまだ進んでいないのが日本の現状である。日本文化特有の伝統的な師弟関係や示範による指導という背景により、教師の指示に忠実に従いながら「技術的に」「正しい」演奏を目指す傾向が依然として顕著である。

実際、音楽教室や保育士養成課程でのピアノ実技指導（個人レッスン）においても、筆者は学習者の自発的な表現や学習意欲を喚起することの難しさを感じている。この課題には複数の要因が考えられる。第一の要因として、レッスンの時間的制約の下で「効率的な技術習得」を目指すために、教師主導の知識伝達型指導に偏る傾向が挙げられる。技術習得の目的化は、学習者に機械的な反復練習を要求し、自主性や音楽性の追求を制限しかねない。結果的に、練習に対する義務感が生じ、学習者が主体的かつ意欲的に取り組む機会が減少する。第二の要因として、カリキュラムの枠組みや教師主導の曲目選択が、必ずしも学習者の興味や背景を反映していない点が挙げられる。この状況も義務感を増大させ、学習意欲の減少を招く可能性がある。第三の要因として、教師の価値観や意向が優先される権威主義的な環境が挙げられる。教師の指示に従順であることを評価される風潮は、学習者自身の探究心や思考力、自己表現の機会を奪う。

本来、音楽教育の本質は「表現性や創造性の深化」にある。重要なのは、個々の学習者が生活の中で見出した興味や関心事をもとに、自らの感覚や感情をどのように言語化し、音楽を通じてどのように表現するかである。芸術的な表現を深めるためには、芸術や表現

に対して哲学的に考察することが不可欠である。自分で考える力を身につけるためには、感性を研ぎ澄ますトレーニングや、感じたことや考えたことを言語化するトレーニングが必要である。これらの能力が備わることで、初めて真の芸術的表現が可能となる。技術は音楽教育において重要な要素ではあるが、あくまで個人の思考、感情、伝えたい内容を表現する手段の一つに過ぎない。技術偏重主義に対して、表現性や創造性に重きを置くことで、主体的な学びの重要性がより一層明らかとなる。

一方、西洋音楽の発祥地であるヨーロッパでは、音楽教育においても現代のグローバルスタンダードに沿った先進的で主体的な学びが形成されている。日本の音楽教育とは大きく異なる点として、教師と学習者間の支配的な関係が排除されていることが挙げられる。また、技術的な側面よりも作品の解釈や表現の深化に重点が置かれている。レッスンは公開された場であり、建設的で創造的な対話を中心に展開される。

実際、筆者もピアニストとしてベルギーの音楽院にて高等音楽教育を受けたが、演奏の技術的な側面は、評価の全体像の一部に過ぎなかった。より重要視されたのは、演奏者の個々の解釈や表現の独自性であり、これらは演奏者の深い思考と感性に根ざしている必要があった。つまり、単に技術的に優れた演奏をするだけではなく、その演奏がどのような意図や哲学的な考察に基づいているのか、また、その考察をどのように効果的に言語化し、音楽に昇華させるかが、評価の核心を成していた。

この観点から、日本の音楽教育においても、従来の技術偏重主義や教師への従順性を超えた、学習者を主体とした新たなアプローチへの転換が求められている。ヨーロッパ諸国の教育方法を参考にしつつ、日本の文化に合った学習者主体のスタイルを探求することが、今後の発展において不可欠である。

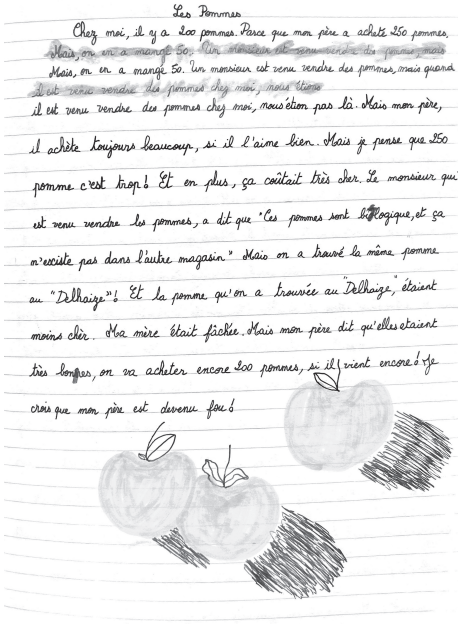
３．本研究の必要性と目的

実際、日本においても、教育先進国を模範に学習者を主体としたアプローチへの転換を図る気運は高まっている。また、この傾向は音楽教育においても歓迎されている。学習者主体の観点こそ、従来の音楽教育の枠組みを根本から変革し、教育の可能性を拡大すると同時に、非認知能力を含む「21世紀型スキル」の向上に寄与することが期待されるためである。

学習者の主体性に焦点を当てた際、世界的に一定の評価を得ている教育の一つとして、フレネ教育が挙げられる。フレネの理念は、学びの中心に子どもを置くという考え方に基づいている。子どもたちを単なる「知識の受け手」と見なさず、自己表現や探究の主体として捉えることを特徴とする。子どもたちの興味や関心を起点として、あらゆる学びに展開され、絵画をはじめとした芸術表現も重視されている。例えば、フレネ教育の重要な柱である「自由テキスト（Texte Libre）」は、子どもたちの日常体験や関心に基づいた作文であり、活版印刷機での印刷を経て、教科書として活用される。（写真1）（写真2）

筆者自身も幼少期にベルギーのフレネ学校（L'Autre École）での学びを経験したが、「自由テキスト」は特に印象深いものであった。（写真3）「自由テキスト」を通して、言葉を獲得し、表現の世界が拡がってゆく過程は、自己実現と表現意欲を醸成する重要な役

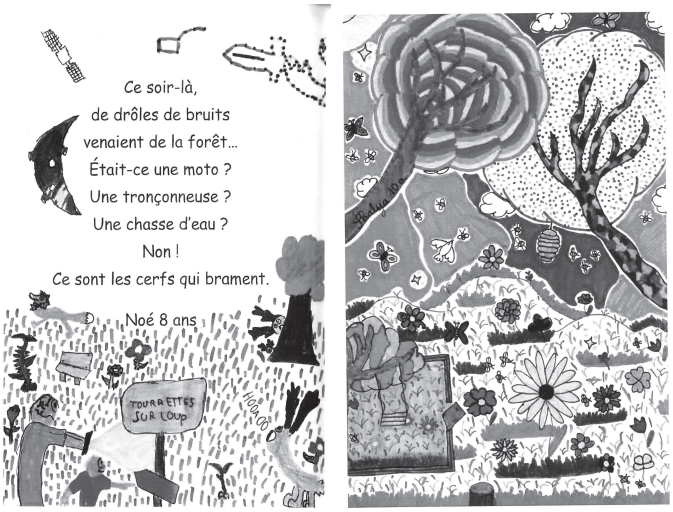
（写真１）活版印刷された「自由テキスト」
（2021-22年 Les Pionniers）



Les Pommes

Chez moi, il y a 200 pommes. Parce que mon père a acheté 250 pommes, Mais, on en a mangé 50. Un monsieur est venu vendre des pommes mais Mais, on en a mangé 50. Un monsieur est venu vendre des pommes, mais quand ~~Il est venu vendre des pommes chez moi, nous étions~~ il est venu vendre des pommes chez moi, nous étions pas là. Mais mon père, il achète toujours beaucoup, si il l'aime bien. Mais je pense que 250 pomme c'est trop! Et en plus, ça coûtait très cher. Le monsieur qui est venu vendre les pommes, a dit que "Ces pommes sont la logique, et ça n'existe pas dans l'autre magasin" Mais on a trouvé la même pomme au "Delhaize"! Et la pomme qu'on a trouvée au "Delhaize", étaient moins chèr. Ma mère était fâchée. Mais mon père dit qu'elles étaient très longues, on va acheter encore 200 pommes, si il vient encore! Je crois que mon père est devenu fou!

（写真３）「自由テキスト」筆者作
（1995年９月）



（写真２）「自由テキスト」
（2022-23年 Les Pionniers）

割を果たした。この経験をもとに、フレネ教育の手法を音楽教育に応用することで、主体性の欠如という課題に対する創造的な解決策の着想を得られると考えている。

また、フレネ教育では、個々のニーズや学習ペースに応じた個人学習と同時に、プレゼンテーションや対話を通じた協同学習も融合されている。その教育理念は、文部科学省が提唱する「主体的・対話的で深い学びの実現」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「STEAM教育[2] 等の教科等横断的な学習の推進」といった教育指針とも一致している。フレネの方法論が始まってから約100年経過した現在も「21世紀型教育の原点」としてその革新性が評価されていることは、注目に値する。[3]

本研究では、ピアノ実技指導という切り口から、フレネの原理を広く音楽教育の枠組みに応用し、方法論の開発と効果の検証を行う。主目的は、革新的なピアノ教授メソッドの開発ではなく、学習者の興味や欲求を出発点とし、個人の感性と思考による深い解釈を重視し、建設的かつ創造的な対話を通した表現力の深化である。

Ⅱ　フレネ教育の概要

1．歴史背景と理念

南仏ガール出身のセレスタン・フレネ（Célestin Freinet, 1896-1966）は、第一次世界大戦で肺を負傷し、大きな声を出すことができなくなった。教師としてのキャリアをスタートさせて以来、当時の権威主義や強制主義、暗唱主義、体罰主義といった特徴[4] を持つ教育に疑問を持ち「子ども中心の教育」を目指した。フレネの理念は、「自由テキスト（Texte Libre）」「コンフェランス（Conférence）」などの独自の教育手法に反映されており「学校に印刷機を！」というスローガンを掲げて、1927年に「現代学校運動[5]」へと発展した。1928年、フレネは「非宗教教育協同組合[6]」を設立し、その実践はヨーロッパ全土に広がった。しかし、サン＝ポールでの批判的な圧力により辞職を余儀なくされた後、1935年に南仏ヴァンスにフレネ学校を開校した。世界的に不安定な情勢の中、フレネは平和運動や労働運動に参加しながら、国際的な教育改革にも顕著な影響を及ぼした。1947年には、フランス国内のフレネ教育による教育実践の運動および研究の組織である「現代学校共同研究所[7]（ICEM）」が創設された。1957年には、国際組織として「現代学校運動国際連盟[8]（FIMEM）」が組織され、2年に1度「フレネ教育者国際集会[9]（RIDEF）」が開催されいる。現在では、約40カ国以上[4] でフレネ教育が実践され、彼の教育理念は国際的に認められている。また、ヴァンスのフレネ学校は、1964年から「実験学校」として運営され、ユネスコ[10] によってESD教育[11] に認定された1991年からは国立、2007年からは県立の公立学校として存続している。2001年には「20世紀の遺産」として認定された。[12]

2．日本におけるフレネ教育

日本では、フランスに留学した若狭蔵之介（1929-2010, 鳥取大学教授）がフレネ教育を導入した。1983年に宮ヶ谷徳三（1935-2005, 神戸大学名誉教授）らと共に「フレネ教育研究会」を設立し、実践を通してその普及に努めた。現在は、フリースクールやオルタナ

ティブスクールに加え、義務教育の枠組みの中の一部でも実践が行われている。

Ⅲ　フレネ教育における音楽活動の実践

フレネ教育とピアノ実技指導の直接的な結びつきを探る先行研究は、筆者の調査範囲内ではまだ見つかっていない。しかし、広く音楽教育の枠組みの中では、フレネ教育の原理に基づく興味深い実践が行われ、その効果が実証されてきた。

1．実践例1：「ミュージックプラン」に基づく学習

猶原和子氏（江戸川大学特任教授）は、音楽とフレネ教育の融合における先駆者として、30年近くにわたり「ミュージックプランに基づく学習」[13] を展開してきた。「ミュージックプラン」は、フレネの「仕事の計画表（Plan de Travail）」と「自由テキストの発表と批評」を原点として始動したものであり、学習の過程を計画・実行・振り返りのサイクルで進める。選択権は子どもたちに委ねられ、自らの興味や目標に基づいて学習を進める。2ヶ月に1度の発表の場では、聴き手による評価やフィードバックが行われ、学習の過程や成果は音楽室に展示される。この実践を通して、子どもたちの音楽的な表現や関心は、自分自身の内部から生じるものだけではなく、他者との相互作用の中で深まり、より充実したものとなることが確認された。

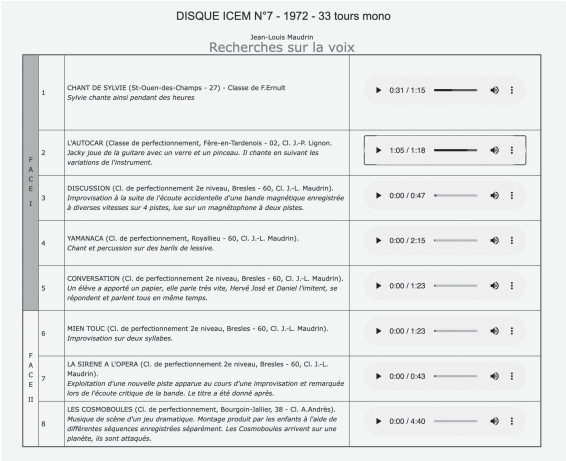
ここで述べられている「他者との相互作用」は、本研究における重要な柱の一つとして位置づけた。「私（学習者）」と「あなた（教師）」に加え「あの人たち（共に学ぶ仲間や聴衆）」、つまり第三者の存在をピアノ実技指導にいかに組み込むかという視点である。現在の個別実技指導は主に閉鎖的な環境で行われており、この枠組みに「他者との相互作用」を取り入れることで、学習の柔軟性を高め、より広範囲な展開を目指すことが可能となる。例えば、発表会や音楽テクノロジーの活用を通じて、外部の音楽環境や他者の表現との交流の機会を増やすことが考えられる。このような相互作用は、創造性や意欲を高め、自己肯定感を向上させることに寄与し、結果的に学習者が安心して自らを表現する場を提供することにつながると期待される。

2．実践例2：ICEM[7] のアーカイブに見るフレネ学校での音楽的実践

ICEM[7] の公式ウェブサイト[14] は、複数のフレネ学校における教育的アーカイブを提供しており、音楽に関連した資料も豊富である。かつてディスクに保存された音源も現在はオンラインでアクセス可能であり、研究者や教育関係者にとって貴重な情報源となっている。（写真4）（写真5）子どもたちの音楽的表現の録音をアーカイブ化し、それにタイトルと解説を加えるこの取り組みは、教育的ポートフォリオの発展における重要な役割を果たしているとも言える。また、フレネ学校における音楽教育のアプローチを理解する上で、これらの資料は非常に有益である。

一例として、1972年1月に録音された「Recherches sur la voix（声に関する研究）[15]」プロジェクト内の「L'Autocar（長距離バス）」と題された音源が挙げられる。この音源に

（写真４）フレネ学校における音楽的活動を記録したディスク



（写真５）ICEMによる教育的アーカイブ「Recherches sur la voix 声に関する研究」（1972年１月）

は、ジャッキーがグラスと筆を使用してギターを演奏し、楽器の音色の変化に合わせて歌う様子が記録されている。ジャッキーは、ギターの弦をグラスを用いて滑らせながら抑え、柔らかくしゃくりあげるような音や、僅かに滑り落ちるようなコミカルな音を生み出している。次第に、声による模倣が加わり、弦の振動する様子や、音程が流動的に漂う様子が巧みに声で表現されている。このわずか1分18秒の録音から、彼の音に対する探究心や好奇心の深さが伝わってくる。

３．実践例３：L'Autre Écoleでの音楽的実践

ブリュッセルのフレネ学校L'Autre Écoleでは、音楽教師によるブログ「En musique et mouvement…（音楽と動きで…）[16]」において授業風景が公開されている。

(1)（写真6）「Ciels de Musique（音楽の空）」という活動は、子どもたちが作曲家となり、水色の画用紙に心に浮かんだ天気を描くことから始まる。この画用紙は3分割されており、移り変わる天候をイメージさせる。子どもたちはこれを楽譜に見立て、グループで音による表現を試みる。打楽器や民族楽器を用いた即興演奏を通じて、様々な奏法の試行や興味深い音の追求、偶然に生まれるリズムから展開するバリエーションなどが観察され、グループ内の相互作用が想像力を促進する様子がうかがえる。

(2)（写真7）「Musique avec de l'eau（水を使った音楽）」という活動は、子どもがお風呂で遊んでいる際に水の音に気づいた体験に基づいている。この活動では、子どもたちが日常生活で経験する興味深い発見を音楽的な表現に変換し、それを展開するものである。このプロセスは、フレネ教育の核心的な原則である「生活から学ぶ」という概念を具体的に示しており、学習者の日常体験が学びの源泉となることを強調している。

（写真６）「Ciels de Musique（音楽の空）」（2012年５月 L’Autre École）

（写真７）「Musique avec de l’eau（水を使った音楽）」（2020年３月 L’Autre École）

他にも「お土産でもらったどこかの国の民族楽器」や「森で拾った木片や葉っぱを使った手作り楽器」を紹介する様子などが記録されている。これらの実践は、子どもたちが生活の中で出会う音や音楽に関連したアイテムを学校に持ち込むことで、共同体内での音楽的共有と探究が促進されることを示している。また、これらの活動を公開することで、子どもたちの学びが家庭や地域社会に波及し、表現の場の拡張に繋がっている。

Ⅳ　筆者によるフレネ教育を応用した音楽実践の開発とその成果

１．実践の対象について

ピアノ個人実技指導においてフレネ教育を応用することは、前述した通り本研究の最終目標であるが、実際のレッスンにおいて、従来の指導方法を根本的に変えることは容易ではない。その効果や結果がある程度明らかになるまでは、保護者や学習者からの理解を得ることは難しく、新しい教育手法の導入は慎重に進められるべきである。そのため、従来のレッスンの枠組みを大きく変更することなく、部分的に実践できるものに限定した。

対象は、筆者の個人ピアノ教室に在籍する4～9歳の子どもと、30～70代の成人、計10

名である。また、2021～2022年度に渡って、筆者が担当する講義（神戸女学院大学「音楽を考えるa」）を履修する大学生約70名も対象とした。大学生を対象とした理由は、幼少期の記憶がまだ比較的残っている年代であることと、自身の経験や思考を言語化する能力が備わっているからである。履修生は音楽専攻生に限定されず、学部は多岐にわたるが、音楽や音楽教育への関心が高いという共通点があり、楽器経験率は約90％であった。いわゆる習い事としての専門的な音楽教育を受けた経験から、本演習に対する建設的な批判を行うことができると考えた。

本研究において、学習者が作成した作品を引用することについては、実践開始前に、参加者あるいは保護者に対し、これらの作品が教育的な目的で他の授業や学術的な発表に利用される可能性があることを明示し、同意を得ている。さらに、本稿への掲載に際しては、個々の作品についてその作者である本人から直接、許可を得ている。このプロセスは、研究倫理および学習者の知的財産権を尊重するために不可欠であることを記しておく。

２．本実践の基盤となる二つの核心的要素

本実践には、2つの基盤となる柱が存在する。第一の柱は、猶原和子氏の先行研究から着想を得た「他者との相互作用」である。この観点では、学習者自身（私）、教師（あなた）、そして第三者（あの人たち）の存在をいかに組み込むかが重要である。このアプローチにより、音楽的体験や感性を他者と共有することが可能となり、学びに柔軟性と広がりが生まれる。また、正解の無い表現が、個性そのものとして他者に受け止められることで、安心して自分を表現できる場が構築される。第二の柱は「言語化」の視点である。音楽は、言葉を介さずとも共感し合えるユニバーサルな言語である。音楽教育の場においても、感覚に頼る面は大いにあるが、人間が「考え」「伝える」ために言語が必須であるのと同様に、音楽においても、深く感じ解釈するためには、言語が果たす役割が不可欠である。

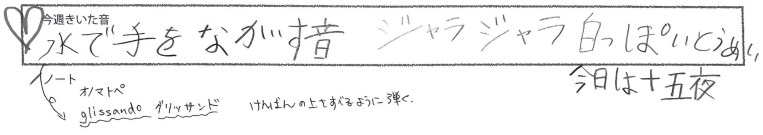
この2つの柱に基づき考案された実践から、7つの具体的な実践を取り上げる。尚、各演習の名称と内容は、対象年齢や状況に応じて柔軟に変更・適応されたため、同一の演習が複数の異なる名称で記されていることがある。

３．７つの実践の方法と結果

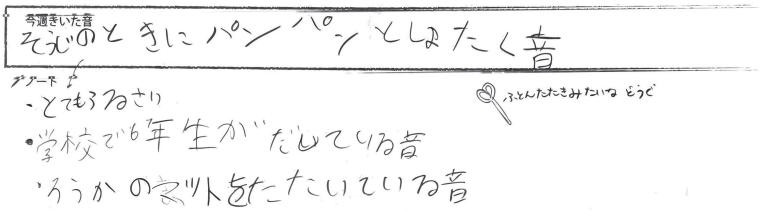
3.1 音の言語化に着目した演習

(1) おとずかん / おさんぽおとずかん（対象：子ども）

本演習は、ひかりのくに出版『さんぽずかん』に着想を得ている。これは、子どもが散歩に出かける際に携帯するポータブル図鑑で『こどもとしぜん』の別冊付録として、春夏秋冬の4冊が刊行されている。自然界の様々な要素が写真と簡単な説明付きで掲載されており、子どもたちは見つけた対象にチェックを入れることで、観察力や探究心を育む。例えば『さんぽずかん 秋[17]』の「ばったのなかま（なくむし）」というカテゴリーでは、写真と併せて虫の鳴き声（「すずむし＜りいいん りいいん＞」「ささきり＜ちきちきちき＞」など）が掲載されている。筆者はこの図鑑からヒントを得て「おさんぽおとずかん」とい



（写真８）「おとずかん」（2023年９月）



（写真９）「おとずかん」（2023年９月）

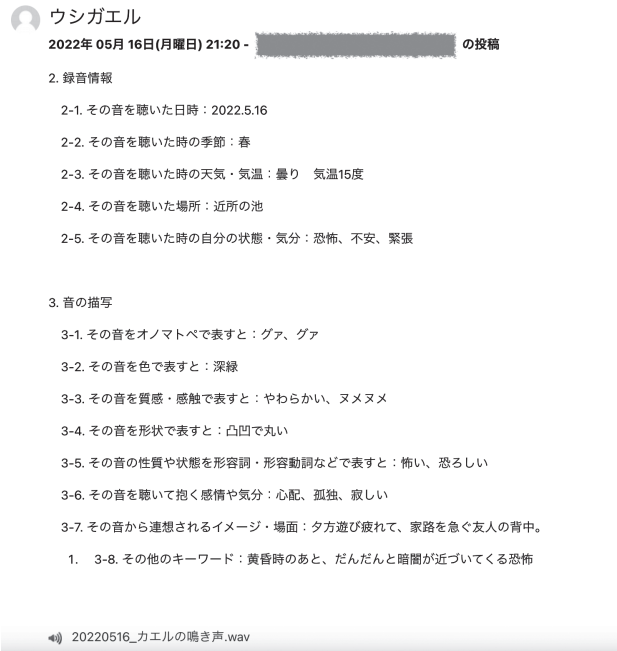
う音に焦点を当てた図鑑を考案した。当初は、子どもたちが外で聞こえる音を記録することを想定していたが、実際の演習を通じて、家の中など身の回りから聞こえる音にも子どもたちの関心が向かうことが明らかになった。そのため「おさんぽ」という言葉を取り除き、より広範囲の音に対する意識を高める方向で演習を進めた。

「おとずかん」では、毎週印象に残った音を書き留めて発表する。この演習の目的は、子どもたちが生活の中の音に意識を向け、それをレッスンの場に持ち込み、音の特徴やそれに関連する感情などをより深く言語化することにある。（写真8）（写真9）教師は、子どもたちの言葉をもとに質問を投げかけ、音の特徴を詳細に掘り下げる。抽出された子どもの言葉は、その音の基本データを構築することとなる。次に、その言語化された音をピアノで再現し録音する。子どもたちは自由に音を選び、自由な奏法で演奏する。しかし、完全な即興ではなく、あらかじめ特定の音を決めてから演奏することを目指している。なぜなら、記憶にある「ある音の印象」を、思考を通じて表現に展開するためである。完成した音源は、タイトルと解説を添えてオンラインで公開され、他の学習者がそれを聴いて感想やコメントを共有することができる。

この実践を繰り返すうちに、子どもたちは生活の中の音への意識を高め、それに伴う言葉もスムーズに出てくるようになった。また、音が子どもたちの個性や興味を表現する重要な手段として機能していることが確認された。

(2) 音の辞書（対象：大学生）

本演習では、Moodle[18] を活用する。学生は日常生活で印象に残った音を録音し、それに対するコメントを添えて提出する。目的は「おとずかん」に類似しており、まずは周囲の音に意識を向け、聴覚を研ぎ澄ますことである。次に、生活の中から集めた音を教室で共有し「表現の場」として展開することである。「おとずかん」との違いは、音そのもの


ウシガエル
2022年 05月 16日(月曜日) 21:20 - [redacted] の投稿

2. 録音情報

2-1. その音を聴いた日時：2022.5.16

2-2. その音を聴いた時の季節：春

2-3. その音を聴いた時の天気・気温：曇り　気温15度

2-4. その音を聴いた場所：近所の池

2-5. その音を聴いた時の自分の状態・気分：恐怖、不安、緊張

3. 音の描写

3-1. その音をオノマトペで表すと：グァ、グァ

3-2. その音を色で表すと：深緑

3-3. その音を質感・感触で表すと：やわらかい、ヌメヌメ

3-4. その音を形状で表すと：凸凹で丸い

3-5. その音の性質や状態を形容詞・形容動詞などで表すと：怖い、恐ろしい

3-6. その音を聴いて抱く感情や気分：心配、孤独、寂しい

3-7. その音から連想されるイメージ・場面：夕方遊び疲れて、家路を急ぐ友人の背中。

1. 3-8. その他のキーワード：黄昏時のあと、だんだんと暗闇が近づいてくる恐怖

20220516_カエルの鳴き声.wav

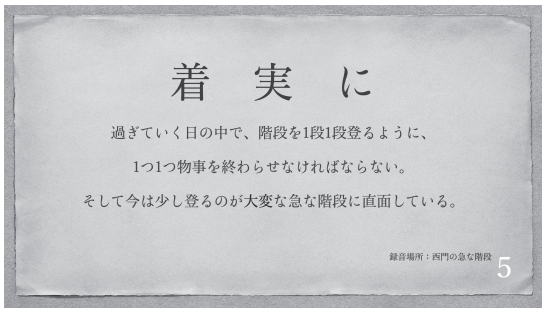
（写真10）「音の辞書」（2022年５月）

を音源として提出し、自身の言葉による解説や分析を加えてアーカイブする点にある。分析は「いつどこで録音したか」などの基本情報から始まり「その音をオノマトペや色、形状、感情で表す」といった、音から連想される描写を含む。最後に音源にタイトルをつけて完成する。このアーカイブは、クラス内の誰でも閲覧・検索可能である。（写真10）

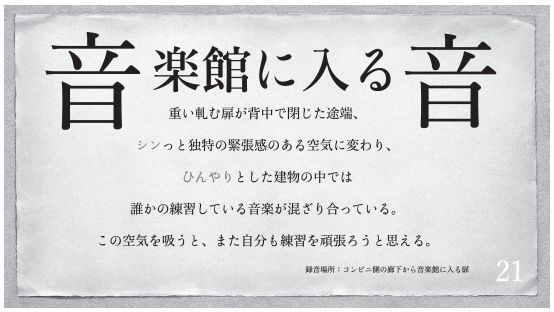
演習後の学生からの感想には、次のような意見があった。「耳が良くなったような気がするほど、沢山の音をキャッチするようになった」「音の特徴や自分の感じ方を言語化することで、世界に存在する響きや質感、雰囲気の異なる様々な音が無意識に私たちの心に影響を与えているということに気付いた」。第三者への「伝達」を意識して音を探索することは、身近な音を能動的に「聴く」動機付けとなり、同時に音に対する感性を深めることが明らかとなった。

（3）音のアルバム（対象：大学生）

「音のアルバム」では、特定のテーマに基づいて、録音した音からイメージされる物語を作成し（自由テキスト）、その音源をBGMとしてスライドショーで上映する。この演習の目的は、音を手がかりとした「自分語り」を行うことにより、自己との対話を深め、親密な自己表現の場を築くことである。また、音や音楽の解釈や、それに想起される感情や気分が、録音時の心理状態に影響されることを体感することも目指している。2022年度のテーマは「これぞ○○」とし、2023年度は「今の私」とした。学生による自分の物



（写真１１）「音のアルバム」（2023年６月）



（写真１２）「音のアルバム」（2023年６月）

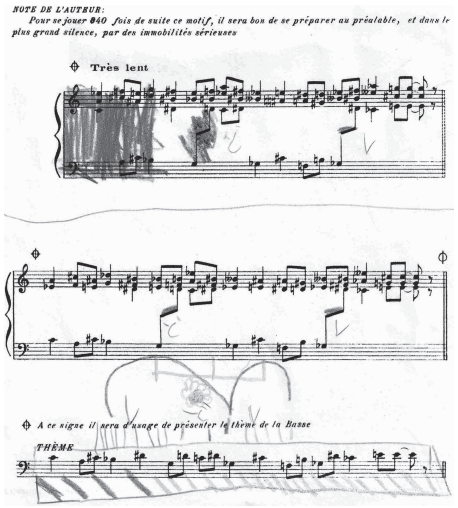
語と録音した音源を組み合わせてスライドショーを作成し、クラスで上映した。（写真11）（写真12）上映後には投票を行い、最も印象深い作品を選出した。評価は「良い/悪い」や「上手/下手」という指標ではなく「共感を呼んだ」または「意外性があった」作品が上位に選ばれた。同じような録音があった場合でも、生まれる物語は各々異なり、個々の感性が際立っていた。

上映後の議論では「音が加わることで言葉だけでは言い表せないものを感じ取ることができた」との感想が多数挙がり、映像よりも想像力を豊かにする効果があったと評価された。

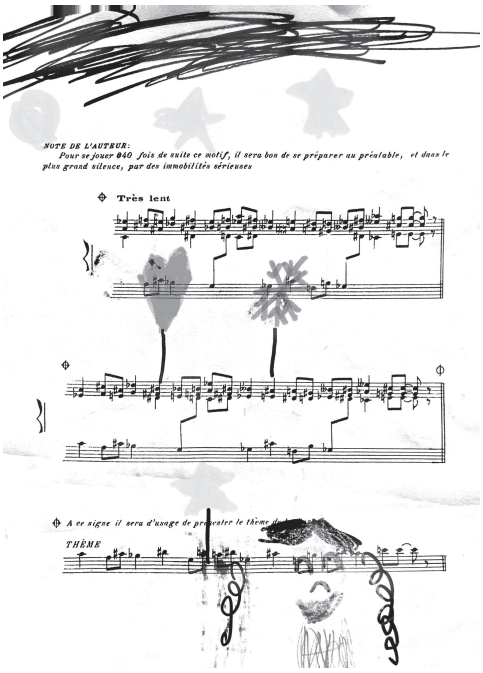
3.2 視覚と聴覚の相互作用を促す想像力養成の演習

(1) 譜読みノート / ぬりえふ（対象：子ども、大学生）

この演習では、楽譜を絵画的に捉え、塗り絵や絵を描き加えることで、そこからイメージを膨らませ、物語を創り出す。目的は、読譜力が未熟な幼児にとっては楽譜に親しみを感じるきっかけを提供することであり、読譜力のある学習者にとっては、楽譜を新たな視点で捉える機会を提供することにある。特に読譜力のある学習者に対しては、演習の意図を丁寧に説明する必要がある。楽譜は作曲者が残した思考そのものであり、細部まで読み



（写真13）「譜読みノート」（2022年４月）

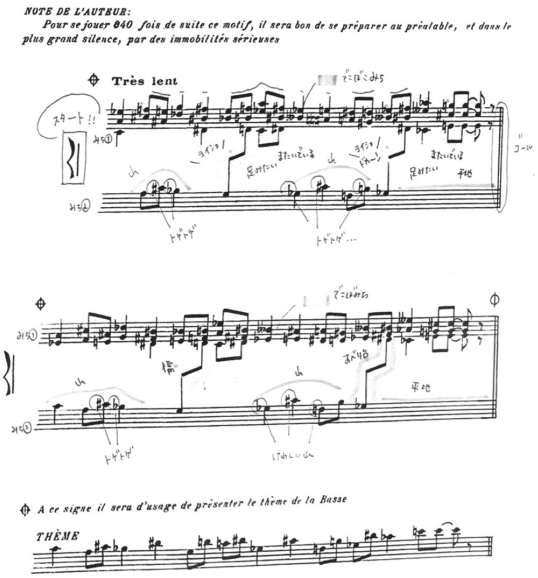


（写真14）「譜読みノート」（2023年11月）

込み、メッセージを忠実に読み取る力が必要とされる。しかし、音符や記号の一つ一つを点で追うのではなく、楽譜を面として捉えることで、視覚的な印象に現れた音楽性に目を向けることに注力する。

両者に共通して使用した作品は、サティ（Éric Satie, 1866-1925）作曲の「Vexation（嫌がらせ）」である。冒頭に「このモチーフを連続して840回繰り返し演奏するためには、あらかじめ心の準備が必要だろう。最も深い沈黙と真剣な不動性の姿勢によって。」との作曲者自身による指示がある。実際の演奏時間は20時間を超えるが、楽譜は52拍からなるA4サイズ1枚のシンプルなものである。この選曲は、シンプルな1枚の楽譜が実際には20時間以上の演奏になる壮大な作品を表しているというギャップに着目したものである。楽譜に自由に色を加え、自分の解釈を物語にしたものをクラスで共有した。最終的に作曲者によるタイトルを明かし、実際の演奏を聴いてそれぞれの物語と比較した。（写真13）（写真14）

本演習において、子どもたちは塗り絵に躊躇なく取り組み、線や記号を加えることでオリジナルな楽譜を仕上げた。五線を「橋」と見立てたり、八分音符を「雷」の形に結び付けるなど、大人には思いつかないような自由な表現を示した。また、子どもたちは自ら描いたイメージから具体的な物語を創り出すことができた。一方で、大学生の間では戸惑いが見られ、多くの塗り絵が音型の分類や楽式分析に基づくものとなった。これは、既存の知識を離れて新たな創造的な視点を持つことの難しさを示すものである。（写真15）



（写真15）大学生による「譜読みノート」（2023年6月）

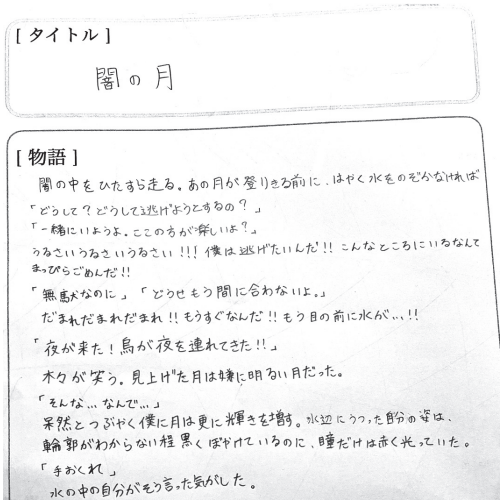
しかし「子どもの頃に見えていた景色を思い出した」「音符以外にも読み取れる情報があることに気づいた」という感想もあった。これは、楽譜を通常とは異なる視点で見ることが、想像力や創造性を刺激する効果があることを示している。

(2) 聴音ノート / おとえかき（対象：子ども、大学生）

この演習では、ルデュック（Jacques Leduc, 1932-2016）作曲「Hommage à Debussy No.1 Mystérieux（ドビュッシーへのオマージュ 第1番神秘性）/5 Esquisses pour pianoより」の演奏を聴き、学習者は自由に絵を描き物語を創作した。目的は、音楽を聴いて具体的な色や形をイメージし、それを言語化する能力を高めることにある。この作品は、無調に近く、使われている音域が広く、ダイナミクスの幅も広く、ゆったりとした印象の中にも細かなパッセージを含むなど、様々な要素が含まれている。また、生演奏で実施したのは、演奏者の身体表現や空間の雰囲気も作品の解釈に重要な影響を与えるからである。演奏はインターバルを挟んで3回程度行われ、絵が完成すると物語を作文した。作品はクラス内で共有され、意見交換が行われた。また、完成した絵はMoodle[18] にアップロードした。（写真16）（写真17）（写真18）（写真19）（写真20）

この演習は、子どもたちにも大学生にも創造性を発揮させるのに適していた。特に「譜読みノート」よりも高い自由度が、参加者の感性や個性の発揮を促した。他者の自由な表現に対する関心も高く、意見交換が活発に行われた。大学生からは「忘れていた何にも囚われずに表現するワクワクを思い出した」「同じ音楽を聴いても皆違った絵を完成させていて面白かった」「それぞれの物語を読むうちにその人の頭の中を覗くことができた気が

（写真16）「おとえかき」
（2022年３月）



[タイトル]

闇の月

[物語]

闇の中をひたすら走る。あの月が登りきる前に、はやく水をのぞかなければ

「どうして？どうして逃げようとするの？」

「一緒にいようよ。ここの方が楽しいよ？」

うるさいうるさいうるさい!!! 僕は逃げたいんだ!! こんなところにいるなんてまっぴらごめんだ!!

「無島なのに」「どうせもう間に合わないよ。」

だまれだまれだまれ!! もうすぐなんだ!! もう目の前に水が…!!

「夜が来た！鳥が夜を連れてきた!!」

木々が笑う。見上げた月は妙に明るい月だった。

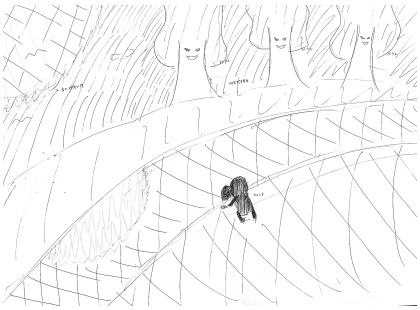
「そんな…なんで…」

突然とつぶやく僕に月は更に輝きを増す。水辺にうつった自分の姿は、輪郭がわからない程黒くぼやけているのに、瞳だけは赤く光っていた。

「手おくれ」

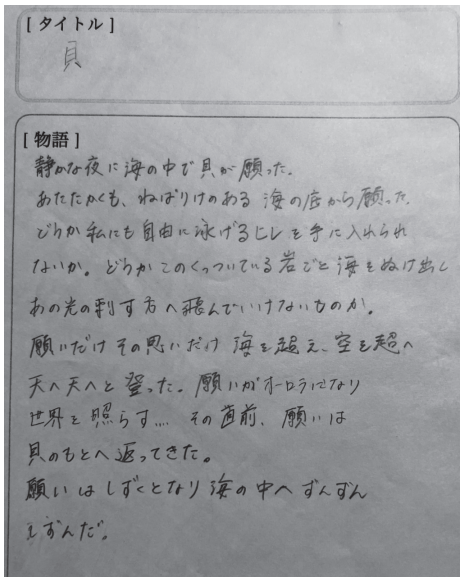
水の中の自分がそう言った気がした。

（写真17）「聴音ノート」物語（2023年５月）



（写真18）「聴音ノート」絵
（2023年５月）
タイトル：闇の月

（写真19）「聴音ノート」絵（2023年５月）
タイトル：妖精たちのダンス


[タイトル]
貝

[物語]
静かな夜に海の中で貝が願った。
あたたかくも、ねばりけのある海の底から願った。
どうか私にも自由に泳げるヒレを手に入められないか。どうかこのくっついている岩でと海をぬけ出し
あの光の射す方へ進んでいけないものか。
願いだけその思いだけ海を越え、空を超へ
天へ天へと望った。願いがオーロラになり
世界を照らす…… その面前、願いは
貝のもとへ返ってきた。
願いはしずくとなり海の中へずんずん
とずんだ。

（写真20）「聴音ノート」物語（2023年５月）

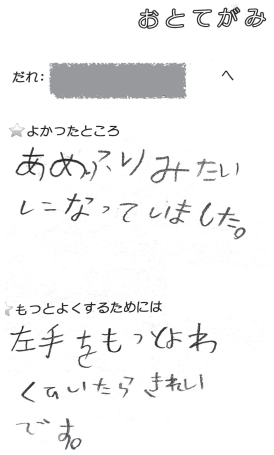
した」という感想が上がり、他者の表現に対する好奇心の高さが明らかになった。

3.3 協同作業を通じた音楽活動

(1) 絵本シアター（対象：子ども、大学生）

絵本に音をつけて朗読する「絵本シアター」は、絵本の世界を音楽で広げることを目的としており、参加者がチームを組んで協同作業を行う中で、絵本の内容について徹底的に議論し、言葉で伝えるイメージを音楽的な表現に転換する技術を鍛える。子どもの場合は、15分×5回の準備期間を設け、大学生の場合は3回の講義（各90分）を用意した。このプロセスでは、絵本の選択から始まり、音決め、役割分担、楽器選びなど、グループ内で協力しながら進められる。教師は必要に応じて音楽的なアドバイスを提供するが、学習者の創造性を尊重する。発表後、最も面白いグループに投票し、建設的なフィードバックを行う時間も設けた。学生の発表は録画され、Moodle[18] で共有された。

この演習を通じて、子どもたちは自分のアイデアが採用されたり、協同で音を作り出すことを楽しみ、満足度も高かった。また「絵本シアター」を通じて習得した新たな技術や知識は、後にも記憶に残るものが多かった。一方、大学生は「読み聞かせに音を取り入れることで、音への意識が高まると同時に、音がない瞬間の意識や緊張感も高める効果に気づいた」と感想を述べたが、チームでの取り組みにおいて遠慮が見られ「気まずい」雰囲気が流れる中で、皆が開放的になるのが難しかったとの意見もあった。年齢が上がるにつれ、人前で自由に表現することへの躊躇が顕著になる傾向が見られた。


おとてがみ

だれ：[redacted] へ

よかったところ
あめふりみたい
にきこえていました。

もっとよくするためには
左手をもっとよわ
くひいたらきれい
です。

（写真21）「おとてがみ」（2023年10月）

(2) おとてがみ（対象：子ども）

「おとてがみ」は、子どもたちが録音した演奏をペアの相手と交換し、手紙を介してコメントをやり取りするものである。この演習の目的は、個人指導が中心のレッスンにおいて、同じ教室の他の学習者との交流を促進することである。まず、子どもたちは教室内でペアを組みたい相手を選び、自分で選んだ楽曲を録音してオンライン上にアップロードする。その後、お互いの音源を聴き、その感想を「おとてがみ」に書いて交換する。このやり取りには「良かった点」と「改善点」、およびその他の感想の自由な記述が含まれる。受け取った「おとてがみ」は、アーカイブとして保管され、次には異なる相手とペアを組む。また、アップロードされた音源は、個人情報に配慮しつつ、教室のアーカイブとして公開され、他のペアの音源も聴くことができる。

この演習を通じて、子どもたちは録音をすることで聴き手を意識するようになり、練習意欲や表現意欲が向上した。また、相手の演奏へのコメントを考える過程は、音楽表現や技術に関する言葉と向き合う機会となり、音楽の構造や音色などに注意を払って聴く力が育まれた。そして、建設的批判を通して、改善に向けての意識が根ざし、自分自身を客観的に見る機会となった。相互の評価が子どもたちにとって大きな喜びとなり、さらなる意欲の向上につながることが観察された。(写真21)

V　考察

1．7つの実践から得られた成果と考察

1.1 フレネ教育と音楽教育の親和性

本研究における7つの実践から得られた成果は、フレネの原理と技術が音楽教育と高い親和性を持ち、音楽教育における主体的な学びに顕著な効果をもたらすことを示している。

フレネ自身は子どもたちの芸術的表現を重視していた。彼の妻である画家のエリーズ（Élise Freinet, 1898-1983）の影響も受け、日常の学習に絵画が密接に関わっている。子どもたちにとって絵を描くことは、文字を書くことと同等に身近な表現手段なのである。さらに、フレネ学校では日々の給食の時間を利用して、演劇的要素を含む詩の朗読が行われる場が設けられている。このことは、子どもたちの芸術的で自由な表現が日常生活に融合していることを明らかにする。このような環境が、フレネ教育と音楽教育の親和性を高めていると考えられる。

1.2 学習者と教師の役割への影響

また、フレネの技法を適用することで、学習者と教師の双方に期待される役割への導きが見られた。学習者は自己の感性や言葉を学びの中核に置くことができ、教師は自らの専門性が必要とされる機会に、学びの変化・展開を認めることができる。このプロセスを通して、学習者と教師との間に、探求の道を共に進む同志のような関係性をもたらす。この関係性は、どんな革新的なメソッドを導入するよりも、学びの本質を具体的で現実的かつ堅固な方法で変革する。さらに、このアプローチは、学習者が安心して自己表現できる場を構築することに寄与すると考えられる。

1.3 他者との相互作用の重要性

本研究の第一の柱である「他者との相互作用」は、学びに流動性と発展性をもたらし、自分の表現を受け止めてもらう喜びや、他者の表現への関心が高まることが観察された。建設的な批判や議論を通じた自己表現の機会は、多様な感性や価値観との交流を促し、表現の幅を広げる。これは、21世紀型教育の目標とも一致しており、グローバル人材の育成にも寄与する可能性を秘めている。

1.4 教育的ポートフォリオとしてのオンラインアーカイブ

また「他者との相互作用」を促進するための手段として開始されたオンライン上のアーカイブは、図らずも教育的なeポートフォリオとしての機能を果たし、学習者の進捗の可視化に役立つことが明らかとなった。学習者が自身の学習過程を振り返るためのポートフォリオは、音楽教育においてもますます一般的になると考えられる。このアーカイブを活用することにより、学習者自身が自分の成長を客観的に評価し、自己認識を深めることが可能となる。また、保護者や他の関係者も、子どもたちの進捗や成果を視覚的に捉えることができ、教育的なサポートを具体的に行うための有効なツールとなり得る。

1.5 言語化のプロセスとその効果

本研究の第二の柱である「言語化」するプロセスは、音楽や音への深い解釈や思考を促進するだけでなく、音を通じて世界を広げる体験につながることが分かった。感覚的で抽象的な音楽の世界を言葉に変換し、それを通じてより鮮明な理解を得ることが可能である。このプロセスから生じる個人的なコミュニケーションは、学習者間、および学習者と教師

の人間関係の強化に寄与すると考えられる。

2．本研究の課題と今後の展望

2.1「気を遣う」文化に起因する課題

音楽教育において、充実した他者との交流を組み込むことの有益性が評価された反面、課題として浮かび上がったのは、日本人ならではの「気を遣う」文化である。一般的な表現「良かった」「面白かった」などが定型化され、それを越えた自由な思考や率直な議論への展開が困難である。この文化的特性をどう扱い、建設的な意見交換が促進される環境をいかに作り出すかが課題である。

また「絵本シアター」における実践から、チーム内でのリーダーシップの取り方やプロジェクト進行の難しさが顕著となった。「チームが同じ方向性を持ったメンバーで構成されていないと、やりにくい」という意見や「もっと積極的に意見を言える雰囲気を作るべき」という提案が示された。これらの意見は、安心して自己表現ができる場を築くためには、信頼関係の構築が不可欠であることを示している。この課題をどのように解決し、学習者が自由に意見を表明できる環境をどう構築するかが重要な考慮点である。

2.2 教育空間の物理的な整備

絵画と音楽の融合を目指した演習を実施する際、画材の提供、楽器の準備、十分なスペースの確保などの課題があり、リラックスして表現性や創造性を発揮できる環境を整えることができなかった。このような環境を提供することは、創造的な学びを促進する上で重要である。教育先進国では、学習者の個性に合わせて居場所をデザインできるオープンプラン型学習環境への移行が進んでいる。また、フレネ学校では、充実した芸術活動を可能にするために、教室にアトリエの機能を備え、豊富な画材を提供している。音楽と美術の効果的な融合や、STEAM教育[2)] の推進のためには、教育のハードウェア面の革新が急務である。

2.3 適切なプラットフォームの選定と活用

大学生を対象とした「音の辞書」では、Moodle[18)] を使用し、子どもが対象の「おとずかん」や「おとてがみ」では、筆者の個人ピアノ教室のYouTubeチャンネルを活用してアーカイブを作成している。しかし、これらの方法は機能的に限定的であり、今後の更なる活用を図る上での困難が予想される。特に、子どもたちが保護者の支援に依存することなく主体的に活用可能な適切なプラットフォームの選定とその活用方法について、検討が必要である。

2.4 日本の伝統的音楽教育とフレネ教育の統合

従来の日本の音楽教育文化とフレネ教育の方法の統合は、重要な課題である。特にピアノ実技指導では、主体的・対話的な学びを通じて感性や表現性、創造性を深めることと同時に「弾けるようになりたい」という期待に応えなければならない。技術の習得と音楽性

の深化、継続的な練習への耐性と表現の喜びを享受することの両立は、学習者にとっても教師にとっても挑戦である。短期間での効果の実感が難しく、成果の視認も不明瞭なため、このアプローチを受け入れることが難しい場合もあると考えられる。これらの実践を定量的に評価し、フレネ教育の導入が主体性の向上にどのように寄与するかを明確に示すことが、今後の研究において必要である。

Ⅵ　結論

本研究により、フレネ教育の応用が音楽教育における主体的かつ対話的な深い学びを促進することが確認された。「他者との相互作用」と「言語化」を軸としたことで、その効果は音楽教育の枠組みを超え、21世紀型スキルとして求められる非認知能力の育成に寄与し、グローバル化人材の育成にも重要な役割を果たすことが明らかになった。また、教育先進諸国との違いや、日本独自の教育文化の背景、それに伴う課題や日本人に適した形への変化の可能性にも注目できた。この研究で検証された方法論をピアノ実技指導に段階的に組み込むことで、技術偏重主義からの脱却と個々の学習者の興味や欲求を中心にした感性と思考を深める学びへのさらなる展開が期待される。

注釈：

1)「VUCA」とは、「Volatility（変動性）」「Uncertainty（不確実性）」「Complexity（複雑性）」「Ambiguity（曖昧性）」の頭文字を取ったもので、現代の変動的で不確実な環境を示す言葉である。
2)「STEAM教育」とは、「Science（科学）」「Technology（技術）」「Engineering（工学）」「Arts（芸術）」「Mathematics（数学）」の頭文字を取った教育アプローチであり、これらの分野を統合的に学習することを重視するものである。従来のSTEM教育に芸術を加え、創造力や批判的思考力の育成を目的としている。
3) フレネ教育ハンドブック：子どもが育つ学びのすじみち. フレネ教育研究会, 2016, p.4
4) 猶原和子 ＆ 渡辺行野. フレネ教育における学習環境の考察：オランダ・ベルギーのフレネ学校を事例に. 江戸川大学子どもコミュニケーション研究紀要. 2, 1-10, 2020, p.1
5)「現代学校運動」Mouvement de l'École Moderne
6)「非宗教教育協同組合」Coopérative de l'Enseignement Laïc
7)「現代学校共同研究所」Institut Coopératif de l'École Moderne
8)「現代学校運動国際連盟」Fédération Internationale des Mouvements d'École Moderne
9)「フレネ教育者国際集会」Rencontre Internationale des Éducateurs Freinet
10) 国際連合教育科学文化機関
11)「ESD教育」とは、「Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）」の略であり、持続可能な未来を形成するための教育アプローチを指す。この教育は、社会的、経済的、環境的な側面を考慮した持続可能性に関する理解とスキルの獲得を重視するものである。
12) 坂本明美. フランス・ヴァンスの「フレネ学校」における教育実践に関する一考察：教育の継承に着目して. 山形大学教職・教育実践研究. 12, 45-58, 2017.
13) フレネ教育ハンドブック：子どもが育つ学びのすじみち. フレネ教育研究会, 2016, p.78-81
14) https://www.icem-pedagogie-freinet.org/
15) https://www.icem-pedagogie-freinet.org/node/6619

16）https://fannymo5.wordpress.com/
17）ひかりのくに，2021年，こどもとしぜん，第58巻第7号10月号（第691号）2021年10月1日発行，別冊付録
18）「Moodle」とは、オープンソースのeラーニングプラットフォーム。LMS（Learning Management System）の一つである。

参考・引用文献一覧

・Freinet Célestin. フランスの現代学校 シリーズ・世界の教育改革7. 石川慶子・若狭蔵之介訳. 明治図書. 1979.
・フレネ教育ハンドブック：子どもが育つ学びのすじみち. フレネ教育研究会, 2016.
・亀倉正彦. 失敗マンダラを活用したアクティブラーニング授業の失敗事例分析とその知識化：学生の「やる気」を引き出す観点から. 名古屋商科大学論集 / 名古屋商科大学論集研究紀要委員会編. 59(2), 123-143, 2015.
・瓦林亜希子.「すべての子どもを受け入れる教育方法」の日仏における歴史と思想：主体的で協働的な学びを組織するための教育哲学「ビヤンヴェイヤンス」とは？. 北陸大学紀要. 44, 17-28, 2018.
・文部科学省初等中等教育局教育課程課. 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料. 令和3年3月版. 2021.
・猶原和子. 日本におけるフレネ教育の展開と課題：シティズンシップ教育の視点から. お茶の水女子大学附属小学校研究紀要. 22, 53-89, 2015.
・猶原和子. 大人も子どもも市民として育つ環境をつくる：レッジョエミリア市の実践からの示唆. 江戸川大学こどもコミュニケーション研究紀要. 1, 25-35, 2018.
・猶原和子. レッスンから表現へ：他者との関わりの中で育つ自分の音楽探し. お茶の水女子大学附属小学校研究紀要. 55-68, 1995.
・猶原和子. 生活から自然な学びへ：フレネ学校の幼児たち. お茶の水女子大学附属小学校 幼児の教育. 102(9), 16-23, 2003.
・猶原和子 & 渡辺行野. フレネ教育における学習環境の考察：オランダ・ベルギーのフレネ学校を事例に. 江戸川大学子どもコミュニケーション研究紀要. 2, 1-10, 2020
・猶原和子. 幼児教育における表現力の育成にむけて. お茶の水女子大学附属小学校研究紀要. 102(9), 103-111, 2016.
・坂本明美. フランス・ヴァンスの「フレネ学校」における教育実践に関する一考察：教育の継承に着目して. 山形大学教職・教育実践研究. 12, 45-58, 2017.
・若狭蔵之介. フレネ教育：子どものしごと. 青木書店. 1988.
・ICEM. Recherches sur la voix. Institut Coopératif de l'École Moderne-Pédagogie Freinet.（オンライン）, 入手先 <https://www.icem-pedagogie-freinet.org/node/6619>,（参照 2023-12-01）.
・L'Autre École. Ciels de musique. En musique et mouvement : Le blog de la musique de l'Autre Ecole.（オンライン）, <https://fannymo5.wordpress.com/>,（参照 2023-12-01）.